

第四章 國土再編成の實踐

第一節 政經抱合の完成

一

吾々は以上に於て大體自由主義經濟の終焉とこれに代る新たなる經濟秩序の發展に觸れ、かかる地盤の上に戰爭が戦はれるときには戰爭による反作用によつて地盤自身が著しい影響を蒙るべきことを述べ、かくして新たなる地盤より生じた現代的意義に於ける國家計畫なるものが決定的な前進をとげるべきことを説明した後、かゝる國家計畫の一環たる國土計畫が如何なることをなすべきであり、且つなし得るのであるかを略述したのであるが、本章に於ては、かゝる意味に於ける國土計畫が、大規模なる戰爭の行はれてゐる現實の情勢の中に於て、差當り如何なることから急速に着手しなければならぬかを取扱つて見ようと思ふ。もとよりこれは抽象的に述べようといふのではなく、日本が現在置かれてゐる情勢の中で先づ何を手がけるべきであるかといふことなのであるから、論述は勢ひ具體的にならざるを得ない。

吾々は既に今日の事態を特徴づけるものは政治と經濟との融合統一であることを述べた。こ

の政經抱合の傾向は、日本に於ては、既に支那事變の勃發以前からその萌芽が現れつゝあつたのであるが、事變の勃發を見るに至つて、戰爭經濟上の必要により、その進行は著しく拍車をかけられ、その間一進一退のあつたことは止むを得ぬところであるとしても、これを全體として見るときには、極めて急速に且つ廣汎に成就せられるに至つたと云ふことが出来る。それはもちろんなほ完成の域に達したと云ふべきではなく、また事實不斷に發展しつゝある社會の中に一つの終止符たる完成を考へることも不合理であるかも知れないけれども、しかし今日見る如き統制會の組織が重要産業部門の全部を抱攝するに至るときには、政經抱合のこの進行は更に新らしい一つの段階を實現したと言へるであらう。しかし政經抱合の進行は決してこれを以て止るべきではなく、更に主體的に勢力的に官民兩界を通じて努めらるべきであらう。

然るにこれに對して、今日の統制は餘りにも微細なる點にまで強力に行はれてゐるとして、在來の滿洲及び支那に對する方策に於て見られぬでもないところの干涉主義の行過ぎなるものを指摘しつゝ、今日の國家統制をもう少し單純化し、大局は國家意思によつて決定せらるべきであるとしても、これに即應すべき細目はこれを民間に委ぬべきである、といふ意見もある。この見解は一應は尤もであり、政府が箸の上げ下しにまで干涉するが如きことが望ましくないことは云ふまでもない。しかしながらかゝる見解の奥には、屢々、日本内部の問題と、共榮圈

内部の日本と日本以外のものとの問題とが、混同せられてゐるのである。

日本の滿洲に對しまたは支那に對する態度が餘りにも微に入り細を穿つの傾きがあるとは時に人の評するところである。これはあながち全面的に事實であるわけではないが、また時にはかゝることの認められぬでもない部面もある。然るに今や日本は全東亞の盟主としてその中に於ける多數の諸民族の運命を背負つてやるべき地位に立つに至つた。この際日本が東亞諸民族に對してとるべき態度は、警察官や小姑のそれであるべきではなく、親心を以てこれに對するの用意の必要なるは云ふまでもない。従つて東亞諸民族の一舉一動を巨細となく干涉統制するといふ態度に出づべきではなく、いやしくも彼等が共榮圈確立の大道に邁進する限り、第二義的又は第三義的なことはおほらかな心持を以て傍觀するの態度をとるべきである。

しかしながらこれがあるが故に國內のことも自然の成行に委せ、一切の活動を各人の自由に委すべきであるといふことにはならない。蓋し東亞共榮圈の建設に當つて日本はその指導勢力たるべきものであるが、この指導に當つて大國の襟度を持つべきであるといふことが、従つて指導者は指導力の凝集結成を怠るべきであるといふことには、決してならないからである。

實に日本に於て政經抱合は大東亞に於ける指導力の凝集の爲に不可欠の前提條件をなすものである。この凝集が成らない限り、指導は分散的となり所謂テンデンバラバラとならざるを得

ない。一貫せる一つの指導を遂行する爲には、指導主體自身が先づ一つのものとならなければならぬ。その爲には日本に於て個を捨て全につく體制が一日も早く成就さるべきであつて、政經抱合こそがその具體的形態なのである。この際個を捨て全につくことは個にとつてなるほど困難なことであらう。しかしそれは日本が眞に指導力を發揮する爲には是非とも遂行しなければならぬことである。それをなほ統制の煩鎖を云爲することは、歸するところ有りし日の自由主義の再來を夢みること以外の何ものでもない。

二

しかし翻つて考へて見るに、所謂官治統制なるものが一部の非難を浴びてゐることには全然理由がないわけではない。蓋し我國に於ける所謂統制經濟は本格的には支那事變の勃發以後からその軌道に乗つて來たものであるが、この前後に於ては前述せる如き眞に革命的な變化が經濟及び政治の分野に於て進行しつゝあり、經濟界及び政界の動きにこれが胎動と前進とを示す幾多の事件が起り、かゝる間に於て戰爭によつて統制の急務が痛感せられる時には、これは勢ひ行政官吏群を中心として行はれざるを得ず、かくて經濟統制の主體は官廳でありその客體は經濟界であるといふ貌をとらざるを得なかつたのである。すなはち行政官は意識的には統制の主體となつて經濟界と一應對立の姿をとり他方政治的の動きはこの姿勢に手をつけるの態勢に

なほ至らなかつた結果として、客體として觀念せられる經濟界には相次いで所謂新體制が形成されて行つたけれども、主體と觀念せられる行政官廳の側にはこれと歩調を合せる動きは必ずしも見られなかつたのである。

従つて今日政經抱合の決定的前進を行ふ爲に先づ行はるべきは、所謂官廳新體制の確立又は行政機構の改革であり、又これに即應しての財政機構の改革でなければならぬ。

かゝる改革が具體的には如何なるものでなければならぬかについては、在來官民各界を通じて色々と論議されてゐる。そしてその一部は既にその緒につきはじめたものもある。これ等の意見や事實を通して見るときには、吾々は全體次の如き改革の大綱を把むことが出来るであらう。

先づ第一に主張せられてゐることは、現在の中央官廳の企畫部門と實施部門とを分つことである。行政がなほアダム・スミスの段階に止る場合には、行政の任務は經濟の外に立つてこれがフェア・プレイを監督するを以て足るのであり、従つて企畫と實施とが同一部門内に屬して居つても何の不都合もなかつたのであるが、しかし今日の如くに行政が經濟の中に入り込んでこれと融合せんとするときは、企畫の權能を例へば商工關係とか農林關係とかいふ風に分つことは企畫の統一性の破壊と實施の不成功を招來する大きな原因となる。従つて今日各省

大臣に分屬する企畫權能を統一し、所謂バラバラ企畫に止めを刺すことが急務となつてゐる。そこでこの企畫權能を集中し、かくして成立する企畫官廳は軍官民の綜合意思によつて動かされるものとしなければならぬ。

かくして企畫權能が集中されるとすれば、その後に残る實施部門は、今日の實情から云つて、殆んど所謂現場官廳となつてしまふ。在來は鐵道省や逓信省の如きもののみが現場官廳と稱せられてゐたけれども、所謂統制經濟の進展は他の各省の事務を著しく現場的ならしめ、その結果として、眞に中央的なる企畫の事務を別とするならば、残るものは殆んど現場事務たる有様である。然るに戰時統制の現場的行政については今日府縣ブロック制の不合理が鳴らされて居り、換言すれば現場的統制行政の單位としての府縣が最早小に過ぐることは定説に近い有様である。然らばかゝる現場的中央行政は、府縣よりも更に大きな地方を單位とする道制又は州制によつて行はるべきであり、かくてこれを共に今日殆んど東京に集中してゐる中央官廳の大規模な地方分散が可能となり、大都市の打破の上にも大きな効果を擧げることが出来るやうになる。そしてかくして分散される中央の現場的行政は、在來既に分散してゐる地方鐵道局、地方逓信局、その他の行政廳と一體化して、道行政廳または州行政廳を形成するのである。

然るに今日の如くに政治が經濟と密接に融合し、今日の閣議決定が明日は豆腐屋の店頭に響

くといふ時代に於ては、郡制なき府縣制は地方行政單位としては大に過ぐるといふ聲が可なり擧げられてゐる。従つて道制または州制を敷くことはこの要求に正反對のものであると云はれるかも知れない。しかしよく考へて見ると、府縣が大に過ぐるといふこの主張と、それが小に過ぐるといふ前の主張とは、實は對立するものではなく、相互に補充し合ふ性質のものである。それは要するに府縣制なるものが今日の事態に適合しないものであるといふに外ならない。すなはち今日の府縣制はこれを廢止し、これに代へて一方では前記の道制または州制を敷くと共に、他方では官廳が國民に一層接近し得る如くに、小縣制または大郡制をとるべきであるといふことになる。

これと共に、今日市町村等の自治團體は、その名こそ自治機關であるけれども事實はその事務の大部分は國家の委任事務となつて居り、従つて官廳たる機能營んでゐる。かくの如く機能が既に官廳化してゐるのであるならば、これに官廳たるの權限を賦與し、名實共に完全に官廳として働き得る道を開くべきである。更に市町村吏員の待遇の問題から見ても、この主張の正當なることがうなづけるのである。そして市町村制を再検討するに當つては、その權能の問題と共にその區域の問題も當然俎上に乗せらるべきである。すなはち大都市の分散が勢力的に實行せらるべきであると共に、過小村を併合することによつてその適當な大いさを有だせるが

如く努め同時に市町村界を適當に是正して、適正なる圏域共同體形成の爲の地的範圍を決定すべきである。

最後に一言すべきは行政監査制の採用である。官廳の行政事務が國民の日常生活の中にかくも浸透してしまつてゐるときにあつては、その適當の企畫と實施とは國家の國防國家完成上また國民生活維持上の不可缺の條件をなすものである。然らば一つの企畫が實施せられて所期の結果を擧げ得ない場合には、その原因が不可抗力にあるか拙劣な企畫にあるかまたは拙劣な實施にあるかを検討し、責任者がその責任をとることは絶対に必要である。そして會計検査が今日の如く立派に運用されてゐるところから見ると、この行政監査制度も決して馴れ合ひの如きに終る虞はないと云ひ得るであらう。

とにかく以上の如き行政改革案が今日可なりに主張されて居り、またその一部はその實行に着手されてゐる。その具體的進路が如何なるものであるにせよ、政經抱合の決定的前進を成就する爲めには、何等かの形に於ける官界新體制の實施は必至なことであらう。

三

以上の如き行政制度の改革と並んで行はるべきものは、この改革に即應せる財政制度、就中地方財政制度の改革である。

今日の地方財政は、その地方の經濟的事情の如何によつて、或は十分の餘裕があり或は極度の窮乏を示すといふ制度になつてゐる。そして財政を豊かならしめる最大なものゝ工場が存在するといふことであり、殊に工場のみが存在して、こゝで働く労働者はその區域外にあるときは、地方財政特に市町村財政中の極めて重大な項目たる教育費の負擔を免れるので、その財政上の豊富は最大となる。これは例へば川崎市の如きに見ることが出来る現象であり、同市域内には多數の大工場が設置せられたのに、労働者は市外特に東京市の蒲田、大森方面と横濱市から通勤するものが大部分を占める爲に、川崎市の収入は多く支出は相對的に極めて低い状態にある。工場労働者が何處に住むかの問題は一應別とするも、とにかく工場の有無が財政收入上に決定的な重要性を有つ實情にあるので、全國の市町村はもとより各府縣も殆んど大部分は今日工場の誘致に極めて熱心であり、それ自身の機構の中に又はその外廓團體として工場誘致の機關を有つことが通例となつて居り、またはこれを極言すればこれ等の團體は今日工場誘致に狂奔してゐるとさへいふことが出来る。従つて市街地建築物法による地域の指定を行ふ場合に於ても、各都市は、その大小やまたはそれが置かれてゐる特殊事情は少しも顧慮せず、とにかく工業地域を大なり小なり有たうといふ執拗な希望を有ち、その結果として全國の各都市で工業地域を有たぬものは殆んどないといつても過言ではない。大阪府の豊中市の如きは僅かに

その例外をなすものであるが、これは大大阪といふ都市活動の中で意識的に住宅都市を造らうといふことであるに止り、大大阪全體の中には矢張り廣大な工業地域があるのである。

凡そ各都市が工場を誘致しようと努めてゐることの根據の中には、極めて莫然たるものではあらうが、とにかくその人口を大ならしめようといふ願望がある。しかしこれは自然發生的なより、大なるものの讚美の思考に發することが多く、吾々の場合としてはむしろ無視しても差支ない。これを別とすれば恐らく上述の地方財政上の根據と、市民人口の増加による消費活動の増大従つて商業の繁榮とこれに伴ふ地價の騰貴とであらう。然るに他方吳や小倉や宇部の如くに反對に工業化の爲にかへつて窮乏の情を示してゐる都市も無いではない。しかし個別的經濟活動が次第に一つの全體へと融合せられて行き、他方自己自身の活動や努力によらずむしろ外部的偶然による利益が否定せられて行きつゝある現在としては、上記の事態を是正する唯一の道は地方財政的制度改革にあると云ふことが出来るであらう。すなはち工業化といふ事實がその地元を特に財政的に有利ならしめるといふ事實を是正し、工業化が行はれると否とに拘らず地方財政はその必要に應じて運営せられ得る道を開き、かくして單なる地元の要望を離れて眞に全體的な國家的な立場から、工場の配置にしろ文化機關の配置にしろこれを決定し得る如くすべきである。然らざる限り全體の爲の國家計畫としての國土計畫といふ風なことを云つて

見たところで、それは所詮一つの空念佛に過ぎないこととなる。

この方向への地方財政制度改革は既にその緒に就いてゐる。すなはち先年の財政改革によつて地方税の多くは中央に委譲せられ、これと共に地方財政補給金が國庫から地方に還元されるといふ道が開かれてゐる。そして市町村財政の大宗たる教育費の中その人件費は全額が國庫負擔となつてゐる。しかしそれにも拘らず、この改正はなほ十分であるといふことは出来ぬ。蓋し一方では國民學校の建築及び修理といふが如き國家的事業がなほ市町村の任務に委ねられてゐると共に、他方工場が進出し土地を買収し工場を新設するといふ場合には當該市町村は多額の収入を期待することが出来るからである。従つて先年の財政改革は更に數歩の前進を遂げなければならぬ。すなはち現在自治體の行つてゐる事業の中國家的性質を帯びるものは擧げて國家の事業に委管せしめると共に、それ自身の努力によるよりはむしろ國家の全體的企畫によつて偶々その市町村が財政的に利得するといふ如き事態を止めなければならぬ。そして地方財政特に市町村財政は出來得る限り隣保的性質を有するものに限る如く努むべきであらう。このことはまた前述せる行政制度改革にも照應するものである。前述の如くに今日の市役所または町村役場の事務は委任事務たるものが極めて多くを占め、それにまた教育關係の事務は全く國家的性質を帯びてゐる。従つてこれ等の機關を名實共に國家機關たらしめる爲には、

これ等を官廳たらしめそこに於ける吏員を官吏たらしめる必要があるが、かゝる改革が行はるべきであるとするならば、それが關與する財政も亦變質しなければならず、すなはち今日地方財政に委ねられてゐる多くのことが國家の手に委管せらるべきであると云はなければならぬ。

今日屢々職域奉公といふ聲が叫ばれてゐる。こゝに職域とは普通抽象的な意味であり、必ずしも具體的な地域を指すものではないけれども、しかしこの職域奉公は地域についても亦行はれなければならぬ。そして地域についても職域奉公が行はるべきであるとするならば、如何なる地域に於て奉公しようとも、奉公の場所を異にすることによつて、判然たる「損得」の關係が生じないやうに、各種の機構を整備すべきである。これが爲の最捷徑は恐らく地方財政制度の改革にあると云ふべきであらう。

第二節 計畫策定の促進

前節に於て述べたところの政經抱合の促進の急務といふことは、要するに、新東亞の建設の爲の國土計畫を策定すべき主體の完成整理の急務といふことに歸する。これは、更に廣く云ふ

ならば、新東亞の建設の爲には、これが建設の集中的責任者たる日本の經濟的政治的實力の凝集と再編成とが必要であるといふことである。しかしながら、今日の事態の下に於て新東亞を建設する爲にはこれが建設に當るべき主體が完成されるといふだけでは足りない。それと共に、この主體を急速に完成し、この建設に必要なとされる計畫を急速に策定樹立し、一刻の猶餘もなくこの建設自身に着手しなければならぬ。舊東亞の秩序が續々と崩壊しつつあるときに、これが計畫的再建に直ちに着手しないならば、これも亦或る意味に於ては一つの再建となり、または無計畫的無秩序的バラバラ再建となり、眞に合理的な再建に着手する爲にはこれに先立つて改めて又も既成秩序の破壊を行はなければならぬといふ破目に陥るであらう。従つてこれが建設主體は急速に完成されなければならず、またこの主體による建設計畫の策定及びこれに基づく建設自體も一刻の猶豫なく完成されなければならないのである。

然るに前述の如く、國土計畫のみが國家計畫をなすものではなく、物資動員計畫や生産擴充計畫や勞務動員計畫や資金調整計畫等その他多くの計畫は何れも現代的意義に於ける一つの國家計畫の異なる側面をなすものである。ところがこれ等の計畫に對する在來の批評の中の最も有力なるもの一つは、それが十分な調査や研究に立脚せず、その場限りの目先の必要に應じて腰だめに決定される結果として、科學的根據を有せず、勢ひそれは朝令暮改的とならざ

るを得なくなり、かくて官僚統制の最も悪い部面の一つをなしてゐるといふことである。

すなはちこの種の論をなすものは曰く、凡そ計畫と名づけられるものは、將來に於ける特定の効果を目標とする現在及び將來の行爲の特定の規範である。従つてこゝに所謂將來に於ける特定の規範なるものが空中に樓閣を畫くの類でない限り、それは現實的基礎の上に立脚しなければならぬ。すなはちこゝに謂ふ將來に於ける特定の效果なるものは、現實から遊離した、または過去の既成事實の集成として現實に存在するものとは無關係な、抽象的思辨やまたは單なる思ひつきの結果であつてはならない。それは現存する事態の延長以外のものであり得ず、すなはち現實の事態の自然生長的發展に對して特定の主體的意圖と活動とを加へることによつて、これに所期の特定の方向を與へることに外ならない。然らば計畫なるものは先づ現實の適確な認識から出發すべきである。そして現存する事態の適確なる認識は調査による以外には得られないものである。而もこの調査たるや、いやしくもそれが科學的なものであらうとする限り、いゝ加減な見當をつけるといふ程度のものであつてはならず、または吏僚が机上で一日にして作り上げる如きものであつてはならず、十分に科學的な方法に準據したところの詳細周到且つ廣汎なものでなければならぬ。然るに今日の官僚統制の諸計畫なるものは何れもかゝる用意を缺いてゐるものである、と。

論者は更に曰く、若しもこゝに謂ふ計畫なるものが單に個人的なものであり、例へば入學試験の準備計畫の如きものであるならば、その計畫が腰だめに止らうとも社會的に大きな影響を及ぼすことはない。この計畫が出鱈目であつた爲に、計畫立案者自身が入學試験に落第したところで、それは社會に衝動を與へるといふほどのことはなからう。しかしながら物資動員計畫とか生産力擴充計畫とかいふ種類の國家計畫は、一方では國家の運命、社會の休戚がこれにかかると共に、他方では國民生活がこれと密接不可離に結びついてゐる。従つてかゝる重大な性質を有する計畫が十分の科學的調査に立脚せずして單に思ひ付きの決定され、而も目先の必要に引きづられて朝令暮改される時には、國家の前途は爲に危く國民生活も亦危殆に瀕せざるを得ない。かくて官僚はいたづらにその職權によつて國政を弄び、國民はその據るところを知るに苦しむといふ状態に陥る。時弊の甚だしき、實にこれより大なるはない、と。

かくて論者は、所謂國家計畫の策定に先立つ科學的調査の必要を力説し、直ちに計畫の策定自體に乗出すといふ如き輕學を止めて、先づ虚心坦懷、白紙の態度に立歸つて、科學的な精密詳細な大規模調査から始むべし、といふのである。

この見解はなるほど今日までの所謂官僚統制の痛いところをついたものであつて、現状の完全なる把握なき計畫がその效果に乏しいことは確かに事實であり、そしてまた今日の各種の國

家計畫がかゝる把握の前提たるべき精密な調査をなす餘裕を有たず決定され實行されるの止むなかつたことは確かに事實である。それと共にこの主張は意外なところでその支持者を得ることが出来た。前述の如くに一つの國民的資本への道は決して坦々たるものではなく、各種のフリクションを通じ一進一退を重ねながら進行するものである。然るにかゝる時に、所謂資本の自由に對し一つの拘束または統制として現れる國家計畫に對してその非科學性を高調し、計畫自身の策定または實施に進む前に先づ綿密周到なる調査を行ふべしといふこの主張が、一部の利益社會から如何なる態度を以て迎へらるべきかは、蓋し思ひ半に過ぐるものがあらう。然らば吾々はかゝる主張を如何に考ふべきであらうか？

二

事實今日までの我が國の各種の國家計畫は、始めから完全なものでは決してなかつた。それは事態の急に逐はれて決定され、急速に實施されたものであつて、精密詳細な現實の認識に出發するものではなかつた。それが最初に決定される時には、その決定の爲に参照せらるべき詳細な調査は行はれて居らず、従つてこれに關する資料は存在しなかつた。さればといつてこの調査を始めからやり出す事態は餘裕のあるものではなかつた。それは謂はゞ焦眉の急に應ぜんとするものであつた。かくて一方には急速實施の必要が切迫して居り、他方には計畫の科學

性が要求されて居りながら、現實の情況から云つてこの双方を同時に満足することが不可能であるといふ事態に於ては、人は果してその何れをとり何れを犠牲とすべきであらうか？ 急速實施の要請をすてて科學的正確性につくべきであらうか？ それとも亦正確性は第二義的として先づ直ちに實施する途を選ぶべきであらうか？

この問題に答へることは極めて容易である。要は問題を抽象的に思辯化しないで、具體的に考へれば答へは直ちに出來る筈である。例へば物價の問題をとらう。低物價政策實行の爲に公定價格制度をとると決した場合に、百般の商品について何が眞に正當な價格であるかを精密に詳細に科學的に決定しようとすることは一應正しい態度であるとも考へ得よう。しかし事實に於てかゝる精密詳細科學的な調査を幾萬幾百萬の商品について急速に實行することは不可能であり、または一つの時に於て正當な價格であつても事情變更の原則に基いて他の時には最早それは正當ではあり得ない。かくてまたも變化せる事情の下に於ける新たな正當な價格に關して精密詳細科學的な調査を實施してゐる中に、問題の眞の根本たる低物價の原則はどこかへ飛んで行つてしまふことになる。然らばとらるべき唯一の有効適切な手段は、所謂科學的正確性なるものを一應第二次的地位に置いて、拙速主義による斷の一字を以て價格のオールストップを敢行することである。かくの如くして決定された所謂修正價格の中には、昨日値上を見た

ばかりのものもあらうし、また餘りにも低過ぎるので明日から値上をしようとしてゐたものもあらう。従つてそれは決して科學的に正當な價格ではあり得ない。しかしこの事情は價格停止令の不當を證明するものでは斷じてない。個々の價格の不合理はまた別にこれが是正の方途を講ずればそれですむのである。そしてこれによつてのみ、低物價の維持といふ根本の大道に觸れることが出来るのである。

かくの如く事實に即して考へるならばこの種の論者の主張の當否は直ちに明白なのであるが、同時にまたよく考へて見ると、この主張の奥には大きな誤謬が存在してゐるのである。吾々は普通一口に簡單に「計畫」と云つてゐるけれども、この計畫といふ語は實は各種の意味を有つものである。そして吾々の今の場合について云ふならば、計畫といふ語は差當り二つの異なる意味を有つてゐる。すなはち企畫活動自身を意味するのがその一であり、かゝる企畫活動によつて出來上つた案を意味するのがその二である。外國語ではこの二つは明瞭に分れて居り、例へばドイツ語では前者は *Planung* といふ語が用ひられ後者は *Plan* といふ語が用ひられてゐるが、日本語ではこの辨別がないので、右の如き論者の主張も現れて來ることとなるのである。計畫といふ語を企畫活動の意味にとるならば、それは強固たる科學的態度によつて一定の案たる企畫を作り出す爲の主體的活動を意味する。それはもとより客觀的現實から遊離せるもの

であつてはならない。すなはちそれは調査や研究から獨立せるものであつてはならない。しかしそれは決してそれに止るべきものではない。それは決して單に頭腦の中で思慮考慮をめぐらすことに止るべきものではなく、活潑なる實踐をその重要な部分とするものである。従つて前に記した如くに、逼迫せる情勢は、成案としての計畫の決定とその實施とを緊急の要務としてゐるのに、これが基礎たるべき所謂科學的調査がなほ十分に行はれてゐないといふ場合には、その際手許にある限りの基礎を利用し、事情の許す限りの現實の認識の上に立つて、一應成案を得、これを實踐に移し、而して後にその一部分が不可能なることがわかつたならば、その不可なる部分を急速に是正し正しい部分を益々伸長することこそが、正しい「計畫」の態度である。従つて計畫は單に朝令暮改の故のみを以て直ちに非難せらるべきものではない。それが故なき朝令暮改であるならばもとより責めらるべきであるが、しかしそれが右の如き事情に基くものであるならば、その改變こそが望まらるべきである。換言すればこの後の場合に於ては、一つの成案としての計畫が直ちに次のそれに變り、すなはち正しいかに見へた計畫が直ちに不可なるものに變るといふことは、一見したところ無定見非科學的なことと考へられるかも知れないけれども、それは實は企畫活動としての計畫が確固として正當であることを證明するものに外ならないのである。換言すれば、この場合に於て、*Planung* の科學性は各個の *Plan* が

遠慮なく非科學性の烙印を押され、すなはち何の顧慮もなく朝令暮改せられるところにこそあるのである。

吾々は何もこゝに朝令暮改そのものを禮讃してゐるのではない。唯企畫活動の本質が活潑なる主體的實踐の中にあることを述べ、従つて事情によつては朝令暮改こそが科學的なこともあり得るのであるから、資料の不足を理由に調査の煙幕の中に韜晦する理由の少しもないことを主張するだけである。

三

さて然らばこの點に關して吾々は今如何なる地位に置かれてゐるであらうか？ 大東亞に於ける舊秩序は續々と破壊せられ行き、皇軍の戦果は實に眼まぐるしい發展をとけてゐる。そして大東亞の圏域を灰燼に歸するのが目的でない限り、こゝに破壊された舊秩序の殘骸は直ちに新しい秩序の網を以て組織立てられなければならない。それが若し自然成長的な復興に委ねられるとするならば、かくして生じた自然成長的な秩序は後に至つてもう一度改めて破壊せられなければならないであらう。かくて生みの苦しみは二重にならなければならない。然らば今日の日本の負つてゐる任務は、舊秩序の紐帯が解消した今日に於てこれを即刻に取上げ、これを新しい秩序の下に組織化して建設することではなければならない。そしてこのことは同時に、戦

闘活動が要求する急速なる復活の要請にも合致するものである。結局日本は今、大東亞共榮圏を急速に建設する必要に迫られてゐるのであり、従つて大東亞國土計畫の急速なる策定の必要に迫られてゐるのである。

然るに他方、かゝる計畫の基礎たるべき現實の事態の認識は決して十分であるといふことは出来ない。既に日本内地に關してすら、この種の調査は決して十分ではなく、況んや南方共榮圏の現情に關しては、極めて大綱的なことを除けば殆んど不案内に近い状態にある。すなはち吾々はこの場合に於て、計畫策定が急務であるのにその基礎たるべき資料を缺いてゐるといふ適例にあるのである。

従つてこの事態に於て日本の處すべき道は極めて明瞭である。この際日本の爲すべきことは、調査と資料の不十分を理由として大調査團を南方に派遣し、これをして精密詳細科學的な調査を実施せしめることではない。調査團の派遣ももとより結構であらう。しかし吾々はこれに止るべきではない。計畫活動の主要なる任務が主體的實踐にあることを考へ、今日吾々の有ち得る認識の一切を動員して、事情の許す限りに於て最善の計畫を至急決定し、これを急速に實踐に移すべきである。そしてこの實踐たるや、百千の調査團の派遣よりも、現地の實情を認識する上に於て最も効果的なものである。

幸にして日本がこれより手がくべき計畫の及ぶ範圍は、北は寒帯より南は熱帯に及びアジアの極めて廣大な部分を占める地域であり、またこの廣汎なる範圍について決定せらるべき大東亞共榮圏の建設要領はその基本的幹線に關するものである。凡そ基本的なるものは、正に基本的なるが故に當然に簡單でありまたは抽象的（思辨的といふ意ではない）でなければならぬ。而も範圍が廣大であるといふことはこの簡單性を一層強めるものである。大東亞國土計畫として決定せらるべきものは、決してバクパパンに於ける共同便所の位置やメナドに於ける無緣者墓地の位置の問題ではない。それは共榮圏の全範圍に於ける産業の配置や民族の配置の問題を主目標とするものである。然らばそれは、東亞の現實の事態に關する認識なくしては不可能であることは事實であるけれども、しかしバクパパンの共同便所に關する事項までも科學的に調査しなければ出來ないといつた代物では斷じてない。

然らば日本が今から直ちに着手すべきことは、一方では矢張り科學的な調査を進めると共に、これに遅れずに、既得の認識の上に立つて、新東亞建設の計畫を決定し實施することである。ばならぬ。それはもちろん完全な科學性を有たず、または實施後間もなく改變の要に迫られるかも知れない。しかしかゝることに憶する必要は毫もない。朝令暮改も事情によつては科學的であり得るとの信念を硬く把持して邁進せざる限り、新東亞の建設は所詮手後れとなるであらう。

私も亦、その科學性に關しては十分の疑を有ちつゝ、次節に於て、右の意味に於ける大東亞共榮圏の構成に關して考へられ得る一案を提示して見ようと思ふ。

第三節 大東亞共榮圏の構成

一

大東亞國土計畫の構想を述べるに先立つて、先づこれが指導理念たるべき、全體としての大東亞共榮圏建設の基本原則について述べなければならぬ。これが日本を指導者とする共存共榮の一體關係の樹立にあることは云ふまでもない。これは言葉としては一見極めて明瞭なことに思はれるかも知れないけれども、しかし事實は決してそれ程簡單ではない。そこで吾々は先づこのことの説明から始めなければならぬ。

先づ日本を指導者とする共存共榮の一體關係と云ふ場合には、二つのことが意味せられてゐる。共存共存の一體關係といふことが第一、それが日本によつて指導せられるといふことが第二である。吾々は先づその第一から論じよう。

全東亞が共存共榮の一體關係を結ぶといふことは、これを抽象的に云ふならば、全東亞が一

丸となり、一個の有機的組織體と化し、それを構成する何れの部分の喜びも同時に全體の喜びであり、またその何れの部分の苦しみも同時に全體の苦しみとなるやうな關係を、作り出すことである。しかしこれは抽象的な言ひ現し方である。然らばこれを具體的に云へばどういふことになるあであらうか？

先づ第一に、これは、東亞共榮圈の建設なるものが日本の爲に行はるべきものではないといふことを意味する。これは今更云ふまでもない。舊秩序の打破による共榮圈の新秩序の建設によつて利するものは日本のみであり、その他の一切の諸國はその犠牲になるといふのであつては、これは米英的秩序の再現でしかないことになる。

こゝまでのところは何人にもこの上なく明瞭なことである。しかしこれを裏返しにして見ると、新たな一面が出て来る。共榮圈の建設によつてその中の或る國だけが利益を享受すべきではないといふことは、同時に、これによつて或る國だけが犠牲と負擔とを荷はせらるべきではないといふことを意味する。換言すれば、共榮圈の建設は日本のみを利する爲のものであつては決してならないが、同時に日本だけが犠牲と負擔とを背負ひ込むべきものではない。新東亞の建設は東亞人全體の喜びでなければならないが、従つてまた全東亞人は、各々その占める地位に應じてこの建設の爲に寄與と犠牲とを惜しんではならないのである。

吾々は今各々その占める地位に應じてと云つたが、これはその能力に應じてと云つてもよい。然らば日本の東亞に於ける地位または能力は如何なるものであらうか？ 日本が東亞に於て指導者たるべきことは前にも觸れたが、これについては後に更に詳述しよう。これを別とすれば、日本は、全東亞に於て、最も優れたる精神力と生産力とを有ち、これによつて舊秩序打破の爲の全東亞の前衛たり主力たる立場にある。そしてこれあればこそ、指導的立場にも立ち得るものである。かくの如く日本はその優秀なる精神力と生産力とによつて舊秩序打破の先頭に立ちつゝあるものであり、従つて舊秩序打破の爲の武力戦に於ても日本がその第一線に立ちつゝあるのであるが、然るにこの日本の優秀なる生産力に對する原材料は必らずしも日本には十分に存在せずして日本以外の東亞諸國に豊富に存在するものが少くない。然らば日本以外の東亞諸國は、かゝる原材料を日本に供給することによつて日本をして後顧の憂なく舊秩序打破と新秩序の建設に邁進し得る如く努めるといふ形で、この解放戦に参加し、建設戦に参加すべきである。この關係によつて日本は決して自己のみが利することを考へるべきではなく、同時にまた日本以外の東亞諸國も自己のみが利することを考へるべきではない。各々はその地位と能力とに應じて全體としての東亞の新秩序の建設に参加協力すべきである。

かくの如くに東亞の諸國が新秩序の建設に協力する仕方が各々異なるとするならば、例へば

單に純經濟的貿易のみをとつてそのみについてパリティを形成するといふが如きことはあり得べからざることである。或るものは全體の爲に精神力を出し、或るものは全體の爲に生産力を提供し、或るものは全體の爲に原材料を供出するといふ時に於て、單に物質的輸出入のみを考へ、これについてパリティの關係を樹立すべしとは、平等の觀念に似てかへつて惡平等の一例に過ぎない。しかしこれと共に、輸出入の關係は適宜に調整せられなければ、恐るべきインフレーションの危機がその後猛威を振はんとして待つてゐることも、確かに考慮しなければならぬ。

しかしながらこの二つの要求は比較的簡單に調整することが出来る。それは爲替操作によつてである。爲替の交換比率を、物資の輸出入の數量に應じて、計畫的に調整するならば、片貿易によつて招來される處のあるインフレーションの危険はこれによつて回避せられ得るであらう。そして片貿易は殆んど専ら日本以外の國に於ける輸出超過の形で起り、従つてそれに基くインフレーションも日本以外の國に於て起る可能性が多いのであるが、この爲替操作によつてこの危険は容易に防壓することが出来るのである。

二

以上の如き具體的手段によつて東亞は共存共榮的な一體とせられなければならぬのであるが、

それはまた日本によつて指導せらるべきものであつた。然るに前述の如く全東亞に對する日本の指導力は、東亞の舊秩序の破壊者たるところから與へられるのであるが、同時にまたそれは東亞の産業的構成の状態からも與へられるものである。今日東亞に於ける工業生産は、極めて若干の例外を別とするならば、前述の如くにその北部に集中して居り、就中日本に集中してゐる。かくの如き工業の日本への集中は、現在に於ける日本の東亞指導力の經濟的基礎をなすものである。かくて日本はこの基礎の上に立ち、またこれ以外の精神的及び物質的理由によつて、東亞の指導勢力として立つてゐるのであるが、しかし日本としては單にこの指導力を現在有つただけでは足りず、更にこれを將來に向かつて確保し続ける用意と努力とを必要とする。然らばこれは何によつて可能であらうか？

日本が全東亞に對する指導力を確保する爲には、主體的に自己清算を敢行し、指導力の凝集を行ふべき必要があることについては、既にこれを述べた。すなはち政治と經濟との融合統一による指導主體の一元化は目前の急務をなすものであり、そしてこれを實現する爲には、經濟界に於ける變容發展は既に著しく進んでゐるから、革進の主流はむしろ政治行政機構の改革及びこれに即應せる財政機構の改革にあることは、前述の如くである。そこでこれを既定の事實とすれば、日本の東亞指導力の繼續的確保は、東亞の産業の一定の構成の仕方によるべきであ

るといふことになる。

右に記した如くに、今日東亞の産業構成の状態を見るに、その工業生産の北部特に日本への集中が見られ、而もこの事實こそは現在に於ける日本の東亞指導力の經濟的基礎をなすものである。然るにまた、東亞の各國が出来得る限りアウトルキイを形成し、船舶による輸送の必要が出来得る限り軽減するには、この工業の北部への集中を打破しなければならぬのである。然らばこの二つの要求は如何なる點に於て調和せらるべきであらうか？ または今日日本に集中せる工業の中如何なる部分を保持し続けることによつてその現在の東亞指導力を確保し、同時にその如何なる部分を分散することによつてアウトルキイ確立の要請に應ずべきであらうか？

先づ全東亞の必要の爲の工業——前述のロウカルな工業以外のもの——の中如何なるものが日本に保有せらるべきかと云ふに、一般的に云へば、それは一方に於ては技術または熟練の關係より見て當分日本以外には立地し得ざるものと、他方に於ては工業の従つてまた全産業の基礎たるべき種類の工業であつて指導力保持の觀點から云つて日本以外に立地せしめることの望ましくないものとの二つである。然るにこれ等兩者は大體に於て一致または交錯する。またはその前者に該當するものは同時にまた概ね後者に該當する。これを具體的に云へば、大體に於て金屬工業、機械器具工業及び化學工業がこれに含まれることとなる。就中金屬工業及び機械

器具工業がこれに該當するのであり、すなはち特殊鋼其の他の金屬精練業、工作機械及び一般機械製造業、航空機及び自動車製造業、鐵道車輛製造業及び造船業の如きは、總べてこの範疇に屬するものである。

製鐵業及びアルミニウム製練業については若干の問題がある。それは蓋しこれ等の工業の原料たる鐵礦及びボーキサイトは何れも日本に於ては自給自足することが出来ず、その壓倒的大部分は日本以外の諸國特に南方に産するのであるが、鐵石の如く嵩高なるものを船舶拂底の今日多大の船腹を使用してこれを日本に運ぶことは、果して策を得たものであらうか否か、特に日本に於ては石炭及び電力の見通しが樂觀を許さない今日に於て、かゝる不安を押し切つてまでこれを實行すべき必要があらうか否か、等の問題があるからである。なるほどこの種の工業は現地に於て起した方が合理的であるやうに思はれる。マレイから莫大な鐵礦を輸送してこれを日本で製練するよりも、これを現地に於て一應製銑した後日本に輸送することは、確かに經濟的に思はれる。しかし製鐵と云ひボーキサイトの精練と云ひ何れもそれに適當する石炭を必要とするのであり、更に後者については多大の電力をも必要とする。従つてこの點を考慮に入れるときには、單に鐵石輸送といふ側面のみから事を斷ずるのはいさゝか危険の感を免れない。恐らくこの問題に對する最良の解決は、鐵石と石炭とを相互に送り合つた上で、この輸送路の

兩ターミナルに精鍊所を設け、このターミナルの間を船舶が往復するといふことであらう。とにかく前述の如き所謂キイ・インダストリイを共榮圏の北部特に日本に集中し、これを適確に把持するならば、これは同時の共榮圏の産業的基礎の把握といふことになる。かくてこれによつて東亞指導力把持の經濟的基礎は與へられるのである。

三

かくの如き共榮圏北部特に日本に立地すべきキイ・インダストリイの原材料は概ね日本に於ては十分に生産せられない。これ等は當然適地適産主義によるの外はないが、その外になほ、資源の不平等分布の關係から當然に適地適産主義による外ないものがある。かゝるもの、すなはち共榮圏内の或地方の物資にしてその地方以外の需要をも満すべき經濟的または政治的理由を有つもの、換言すれば吾々が前に共榮圏の對外的アウタルキイ確保の爲のものと稱したものの、主たるものを擧げて見るならば、——前記の日本立地のものを別として——農水産資源としては、米、ゴム、砂糖、生糸、綿花、マニラ麻、キナ皮、コブラ、玉蜀黍、鹽、魚類等であり、鑛産資源としては、石油、石炭、鐵鑛、錫、ボーキサイト、銅、クロム、マンガン、タングステン、ニッケル等である。これ等のものの生産の共榮圏内の配置は、或る程度に於て自然條件に支配されるとも云へるけれども、しかしそれは一定の場所に何等の變更をも許さない

程度に縛られてゐるわけではない。従つて一定の範囲内に於てはその配置は十分の伸縮性を有つものである。

然らばそれは共榮圏内に如何に配置せらるべきであるかといふに、これを決定するに當つては船舶による輸送量を成るべく輕減するといふ立場が十分に考慮されなければならぬことは、前に詳しく述べた。もとよりこれ等は適地適産主義によるのであるから、船舶輸送を全然不必要にすることは不可能であるけれども、その配置如何によつてはその輸送に要する船舶量は著しく輕減され得るのである。そこでそれは如何に配置されるのがこの目的に最もよく合致し得るかについて考へ得る所を述べて見よう。

先づ農産物から見ると。その中第一に米から述べるに、米は共榮圏全體としては自給が可能である。しかし米の輸出可能地は概ね共榮圏の西南に偏つてゐるので、これが輸送には多大の船腹を必要とする。従つてその栽培地が適宜に變更し得る事情があるならば、輸送の必要は著しく輕減せられ得ることとなる。従つて若し日滿支に於ける米の急速な大規模増産が困難であるとするならば、少くともそれ以外の地方の中で米の輸入國となつてゐるところで米の増産を行ふべきであるといふことになる。

然るに米の輸入國の中、マレイ及びフィリッピンは、ゴム及び砂糖を豊富に産する。ところ

がゴム及び砂糖の共榮圈内に於ける生産額はその必要量を超過してゐるのであり、殊にゴムに於てはこのことは甚だしい。然るに甘蔗晶を米作地に代へることは技術的に極めて容易であり、またゴム園は概ね敵産であるといふ事情はその轉作を經濟的に容易ならしめる。従つてこれ等の地方に於ては轉作による米の増産の可能性が與へられてゐるわけである。

砂糖は臺灣、ジャヴァ及びフィリッピンがその主産地であるが、これは前述の如く稍過剰である。そこで今日では臺灣をその主産地として残り他は轉作を圖るといふ意見が有力であるが、同時にこれによる醸酵工業の興起も十分考慮に値することである。しかし中には、臺灣は米作に轉換せしめて内地への米の補給地たらしめ、日本の砂糖は専ら南方に頼るべしといふ意見もあるが、これも十分注目せられてよい意見である。蓋し日本の必要とする米を運ぶ船腹と砂糖を運ぶそれとは比較にならぬ大きな開きがあるのであるから。

生糸及びマニラ麻は、重要な軍需品であり且つ生活必需品であるが、共榮圈に於けるその生産は過剰である。生糸の生産地は云ふまでもなく日本であるが、この過剰分は、一部分は桑園整理による米の増産により、また一部分は單纖維處理による洋服生地化により解決すべきであらう。マニラ麻の過剰分も加工處理によつて衣料として使用すべきであらう。

棉花は、印度が共榮圈に参加してすら、共榮圈に於ては絶對的不足である。これに對しては、

北支の麥作を棉花に轉換し、北支の食糧は南方から輸入する米を以てするといふ意見と、フィリッピンに於ける甘蔗を棉花に轉換するといふ意見と、西南方特に佛印の米作を轉換するといふ意見との三つがある。しかしこれ等は何れも極めて困難な途であり、これにより急速に共榮圈の棉花需要を満たすことは出来ないであらう。従つて共榮圈に於ける衣料資源としては、——棉花の増産に努めることはもちろんとして——印度及び濠洲が共榮圈に参加するまでは、差當り生糸、麻、スフ及び人絹に主として頼らざるを得ないであらう。

コブラも過剰物資の一つであるが、その油脂による人造バタの優良化とその燃料化とが推奨されてゐる。

玉蜀黍は醸酵工業の主原料として極めて重要なものであるから、これが減産などは問題外である。甘蔗による砂糖製造に代へて醸酵工業を行ふことも必要である。この際バガスの燃料利用を忘れてはならない。

水産資源としては、先づ鹽であるが、事變前に於ける日本の工業鹽は主としてアフリカその他の所謂第三國産のものであつた。事變後は近海鹽に轉ぜざるを得なくなつたのであるが、今後もなほ滿洲、支那、佛印、タイ、スンダ列島等に於ける鹽田の造成と鹽の増産に努めなければならぬ。また魚類については、共榮圈内は北洋及び南洋共に何れも魚類の豊庫であるが差當

りは北洋漁業に主力を置き、南方海面が平靜となるにつれて南洋漁場の開發を圖るべきである。そして海産物の加工處理は後に述べる如くなるべく現地主義を採用すべきであらう。

鑛産資源のうち鐵鑛及びボーキサイトについては既に前に述べた。石油は東印度を主産地とし、ビルマ、北ボルネオ、日本、北樺太等がこれに次いでゐる。これ等が戦前の産油量を維持し得るならば東亞の石油供給の問題は解決されるといふ風の樂觀論もあり、従つて敵軍による破壊の復舊の程度を以て足るといふ意見も一部によつて稱へられてゐるけれども、差當りの軍事行動上の必要と、將來に於ける石油需要の増加の見通しからするならば、更に遙かにより、以上の試掘と開發が必要であらう。そして精油業はそれ程高度の技術を必要としないのであるから、軍事上の特殊の必要ある場合を除けば、現地精油主義をとるべきであらう。同時にまたこれと並んで前記の玉蜀黍その他を原則とする醸酵工業は高オクタン價ガソリンの確保の必要上大規模の擴充を必要とするであらう。

石炭は日本や南方からも産出されるけれども、その主たる埋藏地は支那である。従つて將來の石炭供給の大規模の増加は支那に俟つの外はない。唯支那の石炭は、優良にして豊富なるものは多く海岸線から遙かに隔絶してゐることが、その重大な缺點である。鐵道の敷設または増強による列車輸送といふことも考へられるけれども、しかしこれは豊富且つ低廉な石炭を確保

する所以ではない。蓋し石炭の價格は殆んど運賃であることさへ云はれてゐる上に、列車輸送によつて運び得る石炭の量は極めて限られてゐるからである。従つて多量の石炭を低廉に輸送するには大規模な運河の開鑿に俟つ外はなからう。そしてこの運河網の造成に當つては、農業上の水利の問題も同時に解決し得るが如くに計畫せられなければならない。

共榮圈に於ける鑛産資源の最も弱い環は恐らく銅及びニッケルであらう。銅は日本の外にはフィリッピンやビルマに存在すると稱せられてゐるけれども、軍事行動と生産力擴充とが必要とする量を確保するには可なりの困難があるであらう。従つて代用品の研究及び利用が緊急の必要となつてゐるが、これと共に徹底的な貧鑛の處理が必要であらう。この貧鑛處理に當つては銅のみの回收を試みるべきではなく、副産物を考へることが不可缺であり、これには技術上の困難も多く、また貧鑛は經濟的に長距離輸送に耐へるものではないから、これは主として日本で、而も出來得る限り山元近くで行はるべきであらう。そしてこの際副産物としては肥料が最も重要である。すなはち日本に於ける銅の貧鑛處理は、同時に日本農業の肥料難の解決にも寄與し得るであらう。

ニッケルはニュー・カレドニア及びセレベスのニッケル鑛の利用と、内地産貧鑛の處理以外に方法がない。この中前者の方が重要であるが、これとても需要の全部を満たし得るか否かは

相當に難問である。資源戦争と云はれる現下の戦争の勝利の爲めにはニッケル問題の解決は極めて重要なキイの一つを爲すものである。

鑛産資源の中銅及びニッケルと正反對の地位に立つものは錫である。しかし錫の過剰はゴムに比較すると比較的簡単に処理することが出来る。すなはち錫は長期の貯藏に堪えることが出来るから、差當りこれを貯藏して置いて後の輸出に充てることも出来るし、また貨幣鑄造等に充當することも出来るし、更にまたゴムと異なつて鑛山の封鎖も比較的簡単に行ふことが出来る。錫鑛の處理は錫塊の製造までを現地で行ひ、然る後これを日本に輸送するのが最もよいであらう。

四

以上は吾々が前に共榮圏の對外的アウタルキイの爲の産業と略稱したものについてである。これに對してロウカルなアウタルキイの爲の産業がある。これは概言すれば、生活必需品の生産であり、または所謂平和産業である。もとより今日の如く戦争が總力戦形態をとる場合に於ては、純粹の意味に於て平和産業と云ふべきものは殆んど絶無であらうけれども、こゝに謂ふ平和産業とは常識の世界に於てこの名で呼ばれてゐるものを指すものである。

前述の如くに生活必需品の生産は、共榮圏の各單位地方に於て出來得る限り自給自足を行ひ得ることが望ましい。然るに共榮圏に於ける現實の産業分布は必らずしもこの意味の自給自足體制をなしてはゐない。すなはちその若干の地方にこれ等の生産が偏在してゐるので、かゝる地方に於けるその生産は自給自足してなほ餘りあるのに、他の地方に於ては自給自足の爲には新たにその生産を起し、またはこれを増加する必要があるのである。

生活必需品の生産のうち、各地方のアウタルキイ形成の爲に如何に努力するとしても、なほこれを形成し得ないものがあることは、既にこれを述べた。生活必需品の生産と云へば結局衣食住に關する生活資料の生産であるが、このうち先づ米をとつて見るに、それは出來得る限り自給自足たるべきであるがそれでもなほ輸送の問題を必要ならしめることは出來ないこと、また砂糖についても事情は略々同様であることは、既に述べたところである。魚類も當然に漁場の分布に支配されるのでアウタルキイの形成は困難である。しかし漁獲物の罐詰または加工はこれをすべて日本に於て行ふといふが如きことは止め、出來得る限り漁場に近い所を水揚地とし、この水揚地に於てこれを行ふやう努むべきであらう。

衣料については今日その製造加工は共榮圏の北部特に日本に集中してゐる。そして差當りのその資源としてはパルプ、生糸及び麻の三者であること、及び困難な事業ではあるが棉花の増産は共榮圏の何處かで行はねければならぬことは、既にこれを述べた。パルプの生産は、森

材資源の關係上、差當り日本及び滿洲等の北方が擔當し、次第に開發が進むにつれてニュー・ギニアの如きが擔當すべきであらうし、そしてまたこれによるスフ糸及びスフ織物の生産もこの地方が擔當すべきであらう。養蠶業及びこれに附隨する絹業並びに生糸の單纖維處理も當然日本に於て行ふの外はない。フィリッピンの麻は在來は原料の形で輸出されてゐたが、その處理加工を現地で行ふことを努むべきであらう。

以上の如き種類のもは、何れも生活必需品ではあるけれども、上述の如き理由があるので、完全なアウトタルキイを單位地方毎に形成することは困難である。しかしこれ等の生産については出来る限りアウトタルキイの原則を把持して輸送量の減少に努むべきことは上述の通りである。そして生活必需品の中上記の如き特殊の理由を有たぬこれ以外の各種の衣食住に關する生産物については、凡ゆる方策を講じてその現地生産を圖り、以てその地方の自給自足を企圖すべきである。この種の産業こそは前述の純ロウカルな産業をなすものであるが、それ等の中現在かなりものは日本に於て日本の自給に必要な以上の能力が存在するのであるから、従つてその部分については日本から共榮圈内の他の地方へ移設せしめる必要が生ずるわけである。

かくてこれを形だけの問題として見るときには、これは共榮圏の原始産業地方の工業化であり、または日本工業の海外移設でもある。そして原始産業地方が工業化する爲には、單に問題

の工業をそこに起すといふだけでは足るものではない。これに加へて更に、かゝる工業が可能なる爲の條件が造成されなければならない。かゝる條件としては、少くとも必要な電力の供給や所要機械設備の修理能力の如きが挙げられなければならない。

かくの如くに、雑多な種類を包含するロウカルな工業が、現在主として農業または鑛業の如き原始産業を主としてある地方に興起されるとするならば、それは同時にかゝる地方の工業人口の比率の増大といふことになる。そしてこの際かゝる工業労働人口たるものを、既存の工業労働者の移住によつて行はないとするならば、それは現住民の職業轉換によるの外はない。移住の問題または民族の配置の問題は後に別に説くこととするが、現住民の工業労働者への轉換はそれほど容易なことではないであらうが、この際にも亦日本の指導者としての役割が要求されることとなる。すなはち日本は現住民の工業的熟練の爲に各種の形に於ける教育——學校教育だけの意ではない——に關する努力を惜しんではならないのである。

五

共榮圏の内部に於ける諸民族の配置の問題に入る前にもう一つ論じて置かなければならないことがある。それは産業の配置に基く輸送の問題であり、または船舶の問題である。

吾々は前に、全共榮圈的産業もまた純ロウカルな産業も、何れも一應アウトタルキイの形成を

目標とすべきこと、換言すれば輸送の問題を出来るだけ最小ならしめる必要があることを述べた。しかしこのアウタルキイの形成は著しく困難なものであり、また物によつては全く不可能である。従つて東亞共榮圈を経済的に確立しこれを不動の地盤の上に建設しようとするならば、是が非でもその内部の輸送の問題を解決しなければならぬことになる。而もこの輸送量従つてまた所要輸送力たるや並大抵のものではないのである。

先づ現在日本の有つてゐる輸送力と、今後東亞共榮圈の建設及び維持の爲に必要とされる輸送力とに關し、大體の見當をつけて見よう。支那事變の勃發以前に日本の輸出入商品にして日本船舶によつて輸送せられたものは、大約全體の二分の一であつた。もとより日本船舶にして外國相互間の輸送に従事してゐたものもあるが、それによつて輸送せられた量は決して日本の輸出入貨物の二分の一に達する筈がない。然るに事變勃發後は次第に外國船の東洋航路は減じて居り、今日に至つては最早共榮圈内の輸送は殆んど日本のみが擔當してゐると云つても過言でないのに、爾來増加して來た輸送量は莫大な分量に及んでゐる。すなはち戰鬪行動に伴ふ兵員及び軍需品の輸送や、生産力擴充に要する各種物資の輸送の増加に加へて、更に日本船舶は日本のみならず共榮圈全體の輸送の任務を負ふに至つた。その上にまた、以前にはなかつた外米の日本への大量の輸送や、屑鐵の輸入減に伴ふ嵩高な鐵鑛の輸送といふ事情も生じてゐる。

かくて日本の負擔すべき輸送の任務は飛躍的増大を告げてゐるわけである。

もう少し事情を明確にする爲に、寺島遞相が議會に於て述べた數字を拾つて見よう。それによると、支那事變勃發當時に於ける日本の船腹量は一千噸以上一千隻四百萬噸であり、一千噸以下は隻數は大體同一であるが、量に於ては一千噸以上のものゝ約一〇%位である。然るに當時に於ける造船量は年約四十萬噸であるが、破損、海難、船齡を考慮すると、年約二十萬噸の消耗を見積らなければならぬ。然るに他方東亞共榮圈の建設の爲に幾何の船腹量が必要であるかといふに日本郵船の松隈調査課長は、一般にはこれを一千五百萬噸又は二千萬噸と見積つてゐるが、差當り必要な最低量は一千五百萬噸と見るべきであらう、と主張して居る。かくてこれによつて、今日目前の急務となつてゐるものは一にも船、二にも船、三にも船である、と云はれてゐる事情が大體見當がつくであらう。

これに對する對策として今日決定せられてゐるものは次の六項目である。

- 一、貨物船、油槽船、鑛石船を中心とする大規模造船
- 二、拿捕船の利用
- 三、沈没船の引揚
- 四、木造船の建造

五、外國汽船及びジャンクの利用

六、機帆船の利用

右はこれを大別して鐵鋼船の問題と木造船の問題として考へることが便利である。先づ鐵鋼船から見ると、拿捕船や沈没船の利用及び樞軸國船舶の利用は何れも機宜の措置ではあるけれども、これのみに頼ることは云ふまでもなく危険であり、その主力は矢張り大規模造船に頼らなければならない。そしてこれについては戰時標準船型を定め、鋼材の統一、構造の簡易化、材料の節約、機械の急造等に考慮を拂ひ、同一造船所では同一型の船舶を造ることとなつてゐる。そして船舶用主要資材の需給調整及び海軍管理工場に於ける造船及び船舶修繕に關する監督は擧げて海軍大臣に移管し、造船船は一元的に海軍の指導の下に行はれることとなつた。これは差當りの對策であるが、しかし造船業は一種の綜合的工業であり、それが成立し得る爲には各種の金屬工業及び機械器具工業が整備してゐなければならないのであるから、共榮圈に於ける鋼船製造業は當然日本に立地せしむべきであらう。但し船舶修理はこれを日本に限ることは輸送力の不經濟を生ずるであらうから、共榮圈各地の重要港灣の船舶修理業はこれを維持または興起することを努むべきであらう。

木造船としては大型機帆船及びジャンクの利用と建造とがその中心をなすものであるが、由

來木船製造業は經營規模が小であつて、亂雜の傾向がないでもないから、企業の整備統合によつてこれを大規模化すると共に、大規模な大型木造船の建造を行ひ、共榮圈各地の近海輸送は専ら木造船によるとの原則を樹立すべきである。これには船用機關の大規模増産が必要であり、そしてこれにはボルネオ重油の如きを使用せしむべきであらう。そして木船製造業の立地は出來得る限り適地主義によつて共榮圈各地に分散せしむべきである。これは既存の造船能力の利用にもなり、結局大規模の木船製造に最も都合のよいことであるが、同時にこれによつて、特定海面に最も適する船型の造船が確保せられ得るのである。

六

次は共榮圈に於ける民族の問題である。これに關し就中重要な問題は、それに於て日本人が占めるべき位置如何の問題である。

大體日本人の民族的配置の問題に對しては所謂北居南面論と南進論との二つがある。前者は日本人は日本及び滿洲の如き共榮圈の北部に居住して、南方に對しては單に指導力を確保する程度の少數の指導者を出すを以て足るとするのであるが、後者は日本人は出來得る限り大量的に南方に移住すべきであると主張するものである。しかし後者と雖も北居または北進すなはち滿洲移住の必要を否定するものではなく、これも必要ではあるがそれだからと云つて南進が出

來ないわけではないと云ふのである。従つて北進に對しては國論は略々一定してゐるのであつて、問題は單に南進すべきや否やといふ一點にあることとなる。

更に南進の是非を論ずるに當つても、指導的地位にある最少可能数の日本人が南に行くべき必要については何も議論はないのであるから、問題は指導者以外の多數者が南すべきか否かといふことになる。指導者以外の多數者と云へば結局商人、工業労働者、農民、漁民等である。

一言で云へばそれは中流以下の階級であり、または主として勞務者である。然らば勞務者たる日本人の多數者が南進することは望ましいことであらうか、またそれは果して可能であらうか？

これに對しては先づ生理學的否定論がある。すなはち日本民族は生理學的に云つて南方に居住する適格性を有たない。例へば傳研の石井博士によれば、日本人が南洋に移住するときは先づ體重が〇・三乃至〇・五キロ減少し、體温は〇・二乃至〇・五度上昇し、脈搏は平均一〇の増加を示す。そして呼吸も増加し、血壓は下降し、尿は減量して酸性度を増す。食欲も亦減じ、胃腸の具合が悪くなり、疲勞が甚だしくなる。食欲不振と疲勞と發汗とは體の調子を狂はせ、かくて能力は肉體的にも知識的にも低下し、これに加へて睡眠状態も悪化する。かくてこれが尤すれば各種の神經性の疾患を惹起し、また結核性疾患、心臟病、脚氣等は甚だしく病勢を悪

化する。そして健康人であつても齲齒が一般に増加する傾向がある。これが日本人の南進が生理學的に不適格であることの何よりの證據である、といふのである。

これと共にまた優生學上の理由を擧げるものもある。この際履と厚生省の古屋博士の所説の如きが引證されるのであるが、この點に關する博士の所説とは次の如きものである。すなはち日本人が南進するといふ場合に、それが主として獨身者によつて行はれることは止むを得ないであらうが、これは内地人口の出生率を低めると共に他方出先に於て混血を招來することとなるであらう。この混血の結果如何は日本人と南方人との間については餘りはつきりしたことはわかつてゐないけれども、他の諸國人について見ると好い結果よりも悪い結果の方が多い様に思はれる。中には蠶の一代雜種が良質であると同様に人間も雜種の方がよいと云ふものがあるが、しかしこれは遺傳學上の所謂「餘り」の現象であつて、後になると「減り」の現象が現れることは明瞭である。また由來日本民族なるものは各種の民族の混成になるものではないかと反問せられることもあるけれども、これはなるほど事實であるが、しかしこれは極めて長期間に互つて氣候風土の影響や社會學的淘汰を受けて出來上つたものであつて、單なる混血がその優秀性の原因ではない。更に人によつては日本人の混血層は他日日本民族の血液的前衛層となるであらうといふ人もあるが、これはむしろ事實の正反對であつて、彼等は解決困難な政治的

社會的諸問題を惹起する禍根にこそなれ、母國民族の利益には決してならぬものである、といふのである。

右の如き議論は今日到るところで述べられてゐるが、實はこの問題を解決する爲に眞に考へなければならぬ諸觀點は恐らく次の如きものであらう。

第一に、所謂南方と一口に云つてもそれはピンからキリまでであるから、先づ問題の地方が所謂人口過剰の現象を惹起してゐるか否かを考へなければならぬ。人口過剰が既に起つて居り、而もその地の産業開發を行つても、當分の間労働力は過剰であることが明かなところには、日本人労働力を移植することは、原住民の驅逐政策をとらぬ限り、不可能である。ジャヴァ其の他二三の地方はかゝる地域に屬する。

第二に、問題の地方には既に他民族が強固な經濟的な地盤を築いて居り、この地盤を經濟的に破壊することが困難である爲に、日本人労働力を大量的に移入する爲には、經濟外の強力によらざるを得ないといふ事情が存在するか、または日本人労働力は先住労働力と同一の低級な生活條件を甘受せざるを得ない爲に指導者としての日本民族に對する信頼感が崩壊する恐れがあるといふ事情が存在するか否か、といふことである。タイ國やマレイにはかゝる事情が存在すると云はなければならぬ。

第三に、問題の地方は、共榮圈の所謂人口過剰地域例へば支那やジャヴァ等の人口過剰の吐け口として豫定さるべきところか否か、といふことも考慮しなければならぬ。前述の如く今後の産業開發がこの過剰労働を吸収し得ないとすれば、それは當然に未開地域に移住しなければならぬ。然るに日本人も亦この地方に移り、農業、鑛業または商業に於て勞務者として彼等と競ふといふことは、同じく指導者としての信頼を繋ぐ所以ではあるまい。かゝる性質を最も顯著に有つところは恐らくボルネオであらう。

かくて以上のことを併せ考へるならば、日本民族の大量的移住に適する土地は、資源に富み、人口少なく殆んど無人島の状態にあり、而も面積は内地より遙かに廣大にして、氣候は極めて溫和良好なニュー・ギニアのみであるといふことにならざるを得ない。然らばこの地方への日本人の大量的移住を直ちに實行すべきであらうか？

そこで最後に——しかしこれが最も重大なことであるが——第四に、日本民族の増加力はこの島への大量的移民に堪え得る程大であらうか？これが根本問題である。そして吾々は甚だ遺憾ながら、北方移住の必要を前提してかゝる限り、日本民族はこれを直ちに實行するほどの増加力を現在には有つてゐないと答へざるを得ないのである。

但しこの際ニュー・ギニアについては次の處置をとることが必要である。第一に現状に於て

は日本民族はこの島への大量的移民には堪え得ないのであるが、しかし事情の許す限りは矢張りこの移民を實行すべきである。それがたとへどの程度であらうとも、とにかく出來得る限りの移民を行ふことは、政治的にも經濟的にも極めて必要なことである。唯この際日本人でありさへすれば何でもよいといふ漫然たる態度はとらず、これを計畫的に行ふことが必要である。この計畫については私案がないでもないが、こゝではそれには觸れないこととする。

次に第二に、これを行ふに當つては、民族的純潔を維持する爲の施策が講ぜられなければならない。他民族との經濟的對立を惹起しまたは指導力に關する信賴感を毀損してまで他民族をこの島に入れて資源の開發を急がなければならぬ必要は毫もない。要するにこの島を日本内地の延長たらしめる如くに、他民族の移住はこの島に限り適當に統制するといふことが是非とも必要である。殊に日本民族の急速な移住が困難であればあるほど、この島を好ましからざる民族によつて擅有されない爲の配慮が要求されるのである。この點についても私案がないでもないが、それはこゝでは省略することとする。

七

次は漢民族の配置の問題である。漢民族の地的所在の問題に關して極めて特徴的なことは彼等は出生率及び死亡率共に極めて高く、而もその差たる自然増加率も所謂東洋的高水準にあり、

而も國內の追加勞働力需要は狭小である爲に彼等は不斷に國外に移住するの止むなき状態にあるが、この移住たるや全體としては全く無計畫的であり、而もそれは遠く何處へでも適地を求めて移住するといふよりはむしろ、唯ジリ／＼と近い所から順次に滲み出て行くといふ形をとつてゐることである。従つて漢民族はその隣接地方の何處へでも出て行つてゐるが、その中で今日特に重要な點はその北進傾向と南進傾向または滿洲への移住と南洋への移住とである。

滿洲へ向つての日本人の移住の必要については大體世論は一定して居り、すなはち北方からの政治的軍事的壓力が消滅しない限り日本人はこの地方に益々その地歩を固める爲に出來るだけ多量に且つ急速に移住しなければならないといふのは、今日一般の定説となつてゐる。従つてこの前提の存在する限り、滿洲は少くとも現住漢民族と日本人との天地たるべきであり、または漢民族の移住は大體に於て南に向はしめるべきであらう。なるほど今日に於ては滿洲に於ける人不足の聲が大きく、従つて少なからぬ漢民族が南方から滿洲へ入つて來てゐるのであるが、しかしこれは出來得る限り回避する策がとらるべきである。この點に於ては、由來漢民族はジリジリ押しに動く傾向があるのであるから、北支の過剩なるものは中支へ、中支のそれは更に南へといふ風に、漸次に南へ押して、全體として過剩分は南方に移住せしむべきであると云ふものもある。そしてこれを收容すべき地方としてはボルネオ及びスマトラが最適であると

いふのである。なほ印度民族の東漸を誘導して、これを漢民族と混合共住せしめ、これによつて兩者の何れも共榮圈内の獨占的支配權を握ることなく眞に全體の爲の共榮を圖る道を作るべしと主張するものもある。

漢民族の配置に關しては、尙ほもう一つの問題がある。それは彼等の多くは移住先に於ても出身郷里別に特殊市街を作り、封鎖的密集的居住形態をとつてゐるといふことである。これは單に同郷相親しむといふだけのことであるならば、それだけとしては何の不都合もないことであるが、しかし若しこれが、封鎖居住の故に封鎖的排他的生活方法と生活精神との温床となり、延いては東亞共榮圈建設の爲の障害となるが如きことがあるならば、これに對しては何等かの方策がとられなければならない。すなはち萬一かゝる現象が見られる場合には、所謂支那人街又は廣東街福州街といふが如きものを適當に處理し、諸民族を通じての開放的分散的な居住を爲さしめることが必要となつて來るであらう。

右の如き見地に立つても、また舊秩序の所産であつて新秩序の立場からは經濟的意義が減少したといふ點から云つても、將又その食糧や飲料水の自給の可能性が全く絶望的であるといふ觀點からしても、更に又一般的に大都市形態は好ましくないといふ前述の理由から云つても、とにかく香港の市街地及び昭南島の市街地の處理に關しては急速な英斷的措施が要求せられる。

すなはちそこに於ける人口の少くとも三分の二はこれを分散退避せしめ、その都市機能と都市形態とを出來るだけ縮少することが今日の急務ではあるまいか？ 更に百尺竿頭一步を進めて、軍事的政治的必要と關係なき限りに於てこれ等兩都市をミニマイズすることも考へられるのではなからうか？

なほ民族の配置と關聯して是非考へなければならぬものにジャヴァに於ける老大なる人口過剰の問題がある。これは年百萬にも上ると推量されてゐるのであるが、これを吸収するものとしては、同島に於ける産業開發の外には、ボルネオ及びスマトラを擧げるべきであらう。

以上の外になほ、海南島やミンダナオやセレベスの如きに關する問題もあるが、これ等を論ずることは餘りに細論に互る故に、こゝではこれを省略することとする。

八

所謂人口過剰の問題が出たから、それに關連して一言して置かなければならぬことがある。こゝに人口過剰とは、云ふまでもなく、一平方秆當りの人口の密度が高いとか低いとかいふこととは何も關係のないことであり、またはその地で生産される食物がその人口を支持し得ないといふが如きことゝも無關係なことである。それは嚴密に云ふならば需要せられない勞働力が存在することを意味し、一般的に云ふならば生活の可能性のない人口が存在することを意味す

る。

一般に今日の社會に於ては人口の増減は概數的に勞働力の増減を示すものである。そこで人口の増減を以て勞働力の増減を含蓄するものであると理解した上で、共榮圈内の人口の増減を見るに、それには極めて顯著なる現象が見られる。それは共榮圈に於ては所謂東洋的人口増加なるものが見られるといふことである。

個々の例外はこれを別として全體としての共榮圈を見るならば、正確な數字はこれを知るに由ないけれども、大體に於てその人口増加力は恐るべきものがある。これは何に由來するかといふに、死亡率は極めて高いのであるが、出生率が更に極めて高く、その結果として自然増加が莫大な數字に上るのである。

これは共榮圈を全體として見てのことである。然るに今度は更に立入つてその各部分について見ると、共榮圈の各地方が何れもこの傾向をとつてゐるのではないことがわかる。すなはちその一部分に於ては、死亡率は既に早く下降の傾向をたどり、次いで出生率も亦これにつれて下降しはじめ、而も出生率下降の傾向が漸次に急速化して行くのに死亡率はその下降傾向を鈍化し更に進んで停止的ならんとし、かくて極めて近き將來に於ける人口の自然増加の停止または少くともその著しき減勢が豫想せられてゐる。然るに他の部分に於ては依然として極度の

所謂東洋的人口増加力が現れてゐる。この前者の代表的なるものは日本民族であり、後者は漢民族其の他の原住民族である。

然らば戦争はこれ等二つの異なる傾向に對し如何なる影響を及ぼすであらうか？ 先づ人口増加力の極めて大なる諸民族の側から云ふならば、彼等は在來歐米資本主義の苛酷な搾取の下にあつたのである。然るに戦争の結果としてかゝる條件が消失し、その結果として彼等の生活標準が上昇するとするならば、彼等の死亡率が先づ低下するであらう。死亡率が低下するならば、他の特別の事情の無い限り、出生率も亦何等かの形に於てこれに適應せんとする運動を開始し、遅かれ早かれそれも亦低下の傾向を示すことであらう。しかしこの適應が完了するまでには或る時を必要とする。かくてこの期間には、または死亡率が低下し而も出生率低下がこれに即應するまでの期間には、實に驚くべき人口の自然増加が現れなければならぬことになる。然るに日本民族に關しては、特別の施策がとられぬ限り、人口増加の停止に向ふ傾向を阻止する事情が、戦争から直接に生ずるものとは想像することは出来ない。これは東亞共榮圈完成の爲の基幹的事業を擔當すべき民族の劣勢化といふことになる。然らば日本民族に對してとらるべき政策は死亡の減少に努めると同時に全力を擧げてその出生の増加を圖るといふことではなければならない。然らざれば日本民族は遂に第二のロオマ人の運命に陥らざるを得ないであら

う。

然らば反對に尨大なる自然増加の豫想せられる諸民族については如何？ もちろん舊秩序の解消の後には新たな産業開發が行はれるであらうけれども、その程度たるや決してかの尨大なる勞働力の自然増加の全部を吸収し得ないであらう。例へば人口問題研究所の館稔氏は、東亞諸民族が臺灣本島人と同程度の低き死亡率と高き出生率を有つ様になれば、その人口は一世紀にして現在の十二億から八十億に増加するであらうと推算して居られる。如何に大規模な産業開發を行つても一世紀間に現在以上六十八億の追加人口に生計の途を與へることは蓋し夢に近いであらう。

その結果はどうなるであらうか？ 解放戦たるべき大東亞戦争はその實窮乏戦となつてしまひ、幸福と愉樂の代りに貧窮と不満が支配することであらう。そして死亡率はまたも上昇し出生率は低下し、辛うじて人口の増加は必要な限度にまで壓縮せられるであらう。そしてかくの如き慘害と混亂との結果として得られるものは元の木阿彌に過ぎないであらう。

然らば今次戦争の結果を確保し、これをして東亞諸民族に對する眞の解放戦たらしめ、その結果たる生活標準の向上と愉樂とを彼等に眞に確保し得せしめる爲に、如何なる策がとらるべきであるかは、極めて明瞭である。それは最も賢明な方法によつて彼等の出生力を調整するこ

とである。すなはち生活標準の向上に伴ふ死亡率の低下が一初の戦果を無にせざる如く努めなければならぬのである。

然るに前述の如くに、死亡率の低下が先づ起り次いで出生率がこれに隨伴するといふのが自然生長的傾向であるとするならば吾々の努力の中心は専ら彼等の出生率の調整に向けられなければならない。もとより産業開發が必要とする勞働力の供給がこれによつて窮屈となる如きことがあつてはならない。しかしかゝることは所詮一つの杞憂に過ぎない。蓋し今日の状態に於て既に、支那平野部に居住する漢民族とインドネシア民族とだけで、毎年の所謂過剰人口は數百萬に上ると推算されてゐるからである。

これを要するに、死亡率は既に低下して居り、出生率は今なほ高いけれども傾向としては急速に低下しつゝある民族、たとへば日本民族に對してとらるべき處置は、全力を擧げてその出生率を引上げることであり、また出生率及び死亡率の兩者共今日著しく高率であるが近い將來に於て死亡率の顯著な改善が豫想せられる民族に對してとらるべき對策は、その出生率を低減せしめる爲の適當な手段でを講ずることであらう。

九

最後に文化的施設の配置について一言する。

こゝに文化的施設とは主として教育機關、醫療厚生機關、娛樂機關の三者を指稱するものであるが、東亞共榮圈に於けるこれ等の施設は今日決して適當な分布を示してゐない。その普及度は云ふまでもなく日本が最高であるが、それも殆んど専ら都市特に大都市に偏在してゐる。しかしこれについては前に述べたから、こゝでは主として日本以外の諸國について述べることにする。

共榮圈内の日本以外の諸國にも教育機關は存在するが、しかしそれは在來の支配諸國の國民の爲のものが主であり、またはさうでなくとも原住民の愚劣化を目的とすると稱せられても止むを得ないものが多い。これを是正すべきはもちろんであるが、この一般論の外に、もう一つ注意しなければならない點がある。それは出先の日本人の所謂第二世の教育問題である。

出先の日本人第二世の教育を見るに、在來はそこには國民學校または精々のところ中等學校しかなく、従つて親は第二世の教育をこの程度で斷念するか、一家全部の内地引揚を實行するか、または第二世を費用がかゝり而も安心の行かぬ内地留學に送るか、しかなかつた。そしてこの何れの道をもとらない場合には、現地に於ける外國の學校に頼るの外はなかつた。

これは親として最も困る問題であると共に、民族的にも極めて重大な問題をなすものである。彼等の移住先は、如何に日本人が多いとは云ひながら、自然條件に於ても社會條件に於ても日

本と異なるところである。氣候や風俗や歴史や傳統が異なるところに於て、母國と全く同一の精神を持つてと要求することは要求する方が無理である。然らば第二世以下の自然傾向は、好むと好まざるとに拘はらず、母國とは異なる精神を有つといふことでなければならぬ。然らばこれに對してとらるべき最適の策は、第二世以下の精神的離反を大聲叱呼して責めることではなく、この離反が生じない爲の條件を作ることではなければならない。

これが爲の最も良い方法は、恐らく、第二世以下の或る程度以上の教育を擧げて母國たる内地に於て行ふことであらう。國民學校教育までもこの方法によることはもちろん實行不可能である。然らばそれはどの程度から行ふべきであるかと云ふに、人格の形成期が大體に於て中等學校後期より高等専門學校期にあることから考へて、出来るならば中等學校以上の教育を、止むを得なければ高等専門學校以上の教育を、内地に於て行ふこととすべきであらう。

しかし第二世をすべて内地に於て教育することは、決してこの兩親にとつて安易なことではない。蓋しそれには多大の物質的負擔と精神的不安とを伴ふからである。この後者はとかく輕視され勝ちであるが、教育せらるべき第二世が正に人格形成期にあるといふことは、親をしてその第二世を容易にその膝下から離せしめない重大な理由である。従つてこの物質的並びに精神的の負擔を解除し、而も最もよき日本人を鍊成する爲には、この教育をすべて國家の管理下

に置くのが最も適當であらう。

次に醫療厚生施設について云へば、これは決して病院のみを指すものではない。従つて治病はもちろん、被服、栄養及び居住等に關する施策の改善が行はなければならないのであり、その爲にはこれ等の事項に關する調査研究機關が現地に分布してゐなければならぬ。たとへば南方は所謂熱帯病の巢窟であるが、これは現地に於て研究するのが最適であらうし、また南洋人は一般に酸性血液の者が多くこれが精神的及び肉體的頽廢の原因であり、而もその根源は彼等の食物にあると稱せられてゐる如きも、彼等の精神的及び肉體的ルネッサンスの爲には是非とも解決を要することであるが、これ亦現地に於て十分に研究解決せらるべきであらう。そして就中彼等の生活標準の維持と向上とを確保する爲の適策としての出生力抑止の最適手段如何の如きは、是非とも現地に於て彼等自身について研究解決せらるべきものである。

最後に娛樂機關であるが、東亞諸國に於ける娛樂機關は決してその數を少なしとはしないのであるが、その中少なからぬものは、在來の支配諸國の原住民愚劣化の一手段としか考へられない。従つて適正な娛樂機關の擴充普及を圖るべきは云ふまでもないが、しかしこの際問題になるのは、こゝに「適正」とは果して如何なるものであるかといふことである。

日本人はこの點に關して在來一つの大きな過誤を犯して來た様に思はれる。それは日本人が

餘りに島國根性的であり、または潔癖に過ぎるといふことである。すなはち日本人はとかく自己自身の物指のみで物を計る癖があり、自己の習慣と傳統とに反するものには直ちに不可の烙印を押してしまふのである。しかしながら、なるほど他民族には日本人から見れば理解し得ない風俗や傳習があるかも知れないが、これを反面から見れば、他民族の眼には奇怪としか映らない日本人の風俗や傳習も確かにある筈である。例へば刺身と稱する生の魚肉を珍重する如きは、或る民族から見ると、奇怪を通り越して野蠻にさへ見えるであらう。それをどこまでも日本人の傳習のみが正しく他民族のものはすべて不可であると呼ぶのは、左側通行國民が右側通行國民を奇怪呼ばはりすると同じことである。左側通行であらうと、右側通行であらうと、要は交通が統一的に整理されて居ればよい筈である。従つて日本人の眼には如何に不合理奇怪に見える娛樂であらうとも、それが東亞共榮圈建設の大道と衝突するのでない限り、これに一々干渉する如きは、小姑のおせつかい以外のものではあり得ない。

著者紹介

經濟學士(帝大)、英佛留學。
商工省、總務局、國土計畫。

著書

黎明期の經濟學(巖松堂)
經濟學原論(岩波書店)
國土計畫論(河出書房)

國防科學叢書 5
國防國土學

定價一圓九十錢

印刷日 昭和十七年七月二十五日
發行日 昭和十七年八月五日
初版四〇〇〇部

著作者 吉田 秀夫

發行者 石山 皆男
東京市豊町區三ノ三
ダイヤモンド社印刷部

印刷者 (東京三九九三)
神尾 福太郎
東京市豊町區三ノ三

發行所 ダイヤモンド社
振替東京二五九七六
電話銀座四一五五六

日本出版文化協會會員番號一六五一〇號
東京市神田區淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

(大島製本所納)

若し訂丁の品のあがらた社送料擔にて御取換へ申上りませ

國防科學叢書

全三十二卷

第一回刊行

國防國土學

商工省總務局
國土計畫係

吉田 秀夫

クラウゼヴィッツの兵學上

坂部 護郎

防

空

陸軍中佐

難波三十四

ナポレオン戰史

陸軍少將

伊藤政之助

世界大戰史

陸軍少將

中柴 末純

續刊

國防經濟學

明治大學教授

麻生平八郎

戰と資源

高松高等商業
學校教授

延兼數之助

戰爭法

慶應義塾
大學教授

前原 光雄

野戰兵器

陸軍省兵器局
陸軍少佐

莊司 武夫

海軍戰略

海軍少將

匝瑳 胤次

終